

第2回子ども会推進研究会 2班「地区・県の活性化について」

参加：群馬県：高橋重徳・静岡県：植松一明・山梨県：平島 満・新潟県：真保 栄  
茨城県：坂田 正明・神奈川県：原洋子・欠席：埼玉県：福田政昭

前回の各班の報告

・会員数の減少、子ども会の消滅

市町村で合併が進み、学校の合併により学区がなくなり単位会もなくなって、地域の人数が少なくなるだけでなく単位会の維持ができなくなり、自然消滅と進んでいっている。市子連ごと町子連ごとに急になくなってしまうので、相談ができるようにサポート体制の充実を図る必要がある。

・地域ごとの温度差

地区→市→県と大会があり、子どもの時から行っているので、家族でわかりあえ継続され、盛り上がりが続いている。（上毛カルタ大会など）

特色のある事業は、人と人のつながりを強め、子どもたちだけでなく地域の絆も強めていく。

・全子連（県・市町村子連）の意義

安全共済会だけのつながり→市町村の費用で地域ごと保険に加入→子ども会離れが進んでいる。安全共済会だけではなく、魅力ある活動には、参加者が増える。家族で参加型の事業や大きな組織だからこそできる事業を行うようお願いしたい。また、メディアへ子ども会活動のアピールを

子ども会に入っていてよかったと会員に思わせることも必要であるし、（企業の頒布品、子ども会割引や子ども会優待など）企業とのコラボでもっと活動にも、費用負担をしてもらえるように、PRする必要もある。

会員の方にも企業側にもそれぞれに子ども会の活動をPR認識してもらおう。

・県・地区

ジュニア—シニア—指導者・役員の循環ができるように、子どもたちの活動の楽しさを充実したものにする（少しずつでも行っていく）

また、子どもたちが、あこがれるリーダーになっていくように、今の時代にあった統一された指導方法・カリキュラムの再検討が必要（共通テキストとして「ステップアップの最新版を）安全啓発指導者養成の初級・中級・上級があるように、ジュニア・シニアの研修プログラム統一化をブロックで行い認定制度の検討が必要である。

そのためには、魅力ある指導者の発掘も必要ではないか。

人と人がつながっていくのが、子ども会活動の根本であると考える。

2班：群馬県：高橋重徳・静岡県：植松一明・山梨県：平島 満・新潟県：真保 栄  
神奈川県：原洋子・欠席：埼玉県：福田政昭・茨城県：坂田 正明

### 「地区・県の活性化について」

地区というのが関ブロをさすのか、地域の地区をさすのかによるが、今回は、県レベルの話し合いをすることにする。

#### ◎県で行っている事業

山梨県：J L育成、交流会（県人会）キャンプ、県の球技大会（ミニソフトバレー・Tボール）地域により球技をしていない地区は参加しない。

群馬県：上毛カルタ大会（町内一地区一市一県大会）小さいときから行っているので県内では、活発な事業となっている。その他、市子連レベルで県が共催となる事業もある。

静岡県：リーダー研修（宿泊を伴う）シニア研修など。事業予算補助金を県が出し、各市町村に依頼し、事業の運営を行うってもらう。

新潟県：工作などの活動を各市町村子連で行う年2回程度行っている。HPで県が募集、地元はチラシ配布で参加者を募集している。

神奈川県：J L研修は、県子連S L Cが企画運営している。安全啓発関係の研修（初級・ぼうさい探検隊）読み聞かせなど県が運営、スタッフ派遣、費用を出し、各市町村子連には共催となってもらい会場費・参加募集をしてもらう。

#### ◎県の事務局…2～3名で運営している。

静岡県：3名（事務局長、事務局員、S L関係）新潟県：2名（事務局長、事務局員安全関係）

群馬県：2名（事務局長、事務局員）山梨県：2名（事務局長、事務局員安全）

神奈川県：2名（事務局長、事務局員安全）

現在、各県子連の事業運営は、人的にいっぱいいっぱいの状況で、各市町村子連へ事業委託費を出して運営してもらっている県子連が多い。

#### ◎行政と子ども会

- ・行政は、子ども会についてどのように考えているのか？
- ・任意団体と違って支援しなかったり、青少年育成といい支援してくれたり…
- ・加入率が多い県では、支援が多いが、加入率が低くなれば支援が少なくなってくる。
- ・予兆もなく急に市子連ごと抜ける。
- ・市子連事務局については、行政の人的協力が必要であり、徐々に任意団体であるらと事務局運営までも市子連へ移行しようとしている。市町村子連の事務局が個人宅になると県子連との連絡など大変になる。
- ・行政への働き掛けをどのようにしたらよいか

#### ◎会員増加に関して

- ・中学生のサポーター制度でリーダー養成を行い→シニア（ユースリーダー）に→育成者→指導者へ この流れを少しずつでもよいので会員増加に結び付ける。
- ・体験活動を行うときに中学生スタッフを募集する。（希望者が多い）→小学生の憧

れとなる。中学生になると自分がスタッフとなる。少しでも参加者が多くなってくる。

- ・親の理解を得るために、親子で参加型の事業を考える。

親子ドッチボール大会の参加率はよく、育成者のほうが熱心になる。

- ・抜けてしまった子ども会へのアプローチ

単位会が抜けていくと市子連運営が成り立たなくなり県子連を脱退してしまう。

ぬけた市の青少年課などを通して、出前事業を行い、市子連の必要性などアピールし

少しずつでも復活できるように努力している。(新潟県)

- ・魅力的なリーダーを育成するためにも、魅力的な指導者を発掘し、継続活動ができる体制・組織が必要である。